

藤原 直美氏 今井タオル（株）動力ミシン主任



藤原直美氏



「タオルびと」では二人目となる、タオル縫製のプロフェッショナルが今回の主人公である。実家がかつてタオルメーカーだったこともあり、幼い頃からタオルに囲まれて育ってきたが、本格的にタオル業界で仕事をするようになったのは30歳からである。その間、さまざまな経験を積み、現在は老舗タオルメーカーの今井タオル（株）で縫製部門の主任を務め、日々新しく生まれる多様なデザインのタオルに丁寧かつスピーディに最後の仕上げを施す。その傍ら、後進の育成にも力を注いでいる。

ふじわら・なおみ ☆ 1959年5月、今治市波止浜生まれ。1966年4月今治市立波止浜小学校に入学。同校を卒業後、1972年4月今治市波方町共立北郷中学校（現・今治市立北郷中学校）に入学。小・中学校では学級委員長としてリーダーシップを発揮し、中学校では吹奏楽部に所属して音楽の楽しさを知る。1975年4月愛媛県立今治西高校に入学。在校中、観光業に興味をもったことから、同校を卒業後、1978年4月に日本ビジネススクール観光科に入学。同校で観光業に関する基礎知識を身に付けたのち、1981年4月イースタン観光（株）に入社。1982年3月に体力の限界から同社を退社し帰郷。今治の本州四国連絡橋公団、（有）藤原タオルをへて、2012年12月に今井タオル（株）縫製担当として入社し現在に至る。

1. 幼少年時代

波止浜の、利発で明るい少女

藤原直美氏は、1959年5月24日、今治市波止浜でタオル工場を営む父親の道博氏と母親のタズ子氏の間で3姉妹の長女として誕生した。下には次女・久恵氏と三女・文子^{あやこ}氏がいる。現在、タオル関係の仕事に就いているのは3姉妹で藤原氏だけである。

藤原氏は、1966年4月に今治市立波止浜小学校に入学した。幼少時代の藤原氏は、利発で明るく、学級委員長を担うなどクラスのリーダー的存在だった。

小学校を卒業後、1972年4月に今治市波方町共立北郷中学校（現・今治市立北郷中学校）に入学し、中学校でも学級委員長を務め、リーダーシップを発揮した。そして、中学校時代に3つの貴重な経験をする。まず、吹奏楽部に入部し、先生に薦められてサクソフォンをはじめたことである。それまでピアノを5歳頃から中学校入学まで習っており、また小学校時代のクラス担任のひとりが音楽の専門家であり、その先生の隣でよく歌を口ずさんでいたことを思い出すと、音楽との関わりは長い。北郷中学校の吹奏楽部では、平日は授業終了後の放課後と週末は土日の二日間、毎日ほぼ休みなく練習が入っており、音楽漬けの毎日を送った。その成果もあって愛媛県では上位の成績をおさめ、藤原氏は四国大会に出場した経験がある。中学校時代はなにせ部活動に忙殺された



実家の藤原タオルにて

3歳頃の藤原直美氏

ことが強烈な思い出であり、おかげで音楽が藤原氏の生活の一部になった。


つぎに、ダンスとの出会いである。体育の授業で創作ダンスを踊る機会があり、グループになって踊った際に、先生がそのパフォーマンスに舌を巻き、クラスメイトの前でたいへん褒めてくれた。この経験から藤原氏は踊ることが大好きになった。のちほど大人になってからフラ hula に魅了されるが、藤原氏の舞踊の原点はここにある。




3 際頃の写真で、後ろ左に写っているのが
藤原タオルの工場

最後に、中学校3年生のときに、愛媛県立今治西高等学校（以下、今治西高校）に進学した吹奏楽部の先輩に会う機会があり、先輩が身につけていた制服をみて「自分もこんな制服が着たい」という憧れで、同校への受験を決めたことである。今治西高校は、今治市では屈指の進学校であり、野球では甲子園の常連校でもある。日頃は部活動で多忙な時間を過ごしていた藤原氏であったが、制服への憧れから部活を引退した8月頃から猛勉強を開始した。得

意な科目は国語だったが、数学や理科、社会も平均して好きだった。藤原氏いわく、「人生でもっとも勉強した時間」であった。

藤原氏は、のちに上京して観光業界に入り、ツアーメイト  の職に就くが、中学校の修学旅行は九州の阿蘇周辺へ2泊3日の旅だった。九州は戦前より長崎本線や鹿児島本線、日豊本線が開通し、

別府や長崎、雲仙といった地域がすでに観光地として名を馳せていた。昭和に入り、大分県別府市の亀の井自動車株式会社 （現・亀の井バス株式会社）が別府の地獄めぐりルートにおいて日本初のバスガイドを同乗させた定期遊覧バスの運行を開始した（鳥丸聡[2013]）。もっともバスガイドに似た仕事は大正期からあり、当時はバスガールと呼ばれた。バスガールはそれ以降女性の花形職業となり、1957年に「東京のバスガール」（作詞：丘灯至夫、作曲：上原げんと）というヒットソングが生まれたほどである。藤原氏の観光業界への関心は高校時代に高まったものであり、このときはまさか自分が近い将来にツアーメイトになるとは予想だにできなかった。

憧れの制服で通った今治西高校

1975年4月、藤原氏は猛勉強の甲斐あって今治西高校に進学し、憧れだった制服を着て通学した。夢は叶った。「気分は上々」のはずだったが、慣れてしまえば熱は冷める。また厄介なことに、受験勉強で燃え尽き症候群に陥ってしまい、勉強はそこそこで部活動も中学時代に比べると熱量が下がってしまった。それでも1年次の数ヶ月間吹奏楽部に所属し、野球の地区予選の応援で演奏した。今治西高校は、愛媛県を代表する野球の強豪校であり、1918年に初出場を果たしてからこれまで選抜高等学校野球大会（春）14回、全国高等学校野球選手権大会13回（夏）の出場記録をもっている。

2年次は友だちに誘われて茶道部に入部し、吹奏楽部とはまるで違い、ゆっくりと静かな環境で茶道の基本的な作法について学んだ。部活動よりも、高校時代に印象に残っているのが運動会である。各クラスが披露する応援はたいへん華やかなものだった。藤原氏のクラスでは、ダンス・チームと衣装制作チームの2つにわかれ、踊りが好きだった藤原氏はダンス・チームのメンバーに入り、練習に励んだ。しかし、藤原氏が感動を覚えたのは踊りのパフォーマンスではなかった。衣装制作チームが拵えたハンドメイドのドレスの出来

栄えだった。



「県大会野球応援」

（今治西高等学校文化委員会編「蛍雪」愛媛県立今治西高等学校、
1975年より引用）

素人にもかかわらず、丁寧な仕事ぶりに感銘を受けたのである。「わたしらは踊るだけでね。踊るのは誰にでもできるし、ごまかせるしね。でも、ドレスづくりはそうはいかない。裏方に徹して、一生懸命にきれいな服をつくってくれて、もうすごいとおもった記憶がありますね。」藤原氏自身は、社会人になってからモノづくりの楽しさに目覚めるが、モノづくりの凄さに感動を覚えたのはこの瞬間だった。

2. 上京、そして帰今

憧れだった観光業界に身を置くも・・・

こうして、高校時代はそれなりに楽しい時間を過ごしたが、観光業界やファッション業界に興味をもつようになり、卒業後は上京して観光について学べる専門学校に進学した。

1978年3月に今治西高校を卒業し、同年4月に東京都渋谷区にあった学校法人日本ビジネススクール観光科に入学した。同校では2年間にわたり、旅行会社に就職するための基礎的な知識を学んだ。東京を選んだのは、流行発信地であると同時に、高校時代の親友が東京学芸大学に進学を決めたことも理由である。若者に人気のエリアである目黒区に居を構え、気の置けない仲間と渋谷や原宿、表参道、青山、六本木などに繰り出し、ファッションやメイクにますます磨きをかけた。踊りも欠かさず、カルチャーセンターの主催するモダンバレエのスクールに通ったり、ディスコで踊ったりもした。

1981年4月、専門学校を卒業した藤原氏は、予定どおり観光業界に就職した。就職先のイースタン観光（株）は、横浜市に本社を置くバスツアーを企画・運営する会社だった。藤原氏はツアーメイトとして、栃木県や群馬県、長野県など関東一円の温泉や観光地へ修学旅行生や一般人のツアーに同行し、旅人の思い出づくりに一役買った。ツアーメイトの仕事に携わり、嬉しかった思い出は、幼稚園児の遠足に同行した際にバスのなかで絵本を読んであげると、「もっともっと」と手を叩きながら笑顔くれたことである。そのときの子供たちの笑顔はいまでも心に残っている。

現役時代に同行したツアーでもっとも遠かったのが青森県の十和田湖だった。通常は関東近辺でのツアーが主だったが、想像していたよりも体力勝負の仕事だった。1週間のうち3日ツアーに同行し、2日間休息をとるという生活のリズムだったが、休日でも次回ツアーの予習などでかなりの時間をとられた。当時は現在のような働き方ではなく、現場はかなり無理をして業務をこなしていたため、平均して1年で退職するツアーメイトが続出した。藤原氏もそのひとりだった。体力の限界には勝てなかった。

バスガイドは、高度成長期以降の好況にもよる旅行需要の拡大で長い間人気の職業のひとつであったが、2000年頃に転機を迎える。2000年の道路運送法や運輸規則の改正によって貸切バスでも運転手1人での運行が可能となったり、ガイド料金が運賃と切り離され

たり、安さ重視の需要が高まったり、少子化から修学旅行生が減少したり、さらに時代の変容とともに団体旅行よりも個人旅行が増えたり、バスガイドをとり巻く環境に大きな変化が起こった。その結果、2000年代に入ってもバスガイドの数は減りつづけ、日本バス協会の調べによると（会員事業者対象）、調査をはじめた2007年は5,354人だったが、2023年には2,240人の半分以上に縮小した。インバウンド効果で海外からの観光客が増加するなかで、現在はバスガイド不足が問題となっているが、一方で女性の運転者数は漸増している。おなじく日本バス協会の調べによると、1995年に186人だった女性運転者は2019年に1,867人へと増え、24年間で10倍の伸びを示した（日本バス協会編[2020]98頁）。

藤原氏は、過酷な労働環境ではあったもののツアーメイトとして濃密な一年を過ごし、1982年3月に同社を退職した。退職後も藤原氏は東京にとどまる予定だったが、両親から帰国するように言われ、半ば強制的に今治に戻ってきた。実は、高校卒業後に上京を決めた際も両親からは反対されていた。女子は県内、あるいは遠くても関西地方へ進学するか就職するかが時代の流れだったからだ。藤原氏は、専門学校時代とツアーガイド時代の合計4年間を東京で過ごしたのち、東京が性に合っていただけに後ろ髪を引かれる思いで、東京を引き上げた。

（次号につづく）

